불교학연구 (Journal for Buddhist Studies)
제46호 (2016.03) pp. 1～15

# paṃsukūlaについて*

**青野　道彦**
東京大学大学院特任研究員
m_aono@l.u-tokyo.ac.jp

I. はじめに
II.「襤褸切れ」を意味するpaṃsukūlaの用例
III. 原意に立ち返って理解すべきpaṃsukūlaの用例
IV. paṃsukūlaの多様性
V. 最後に

**요약문**

초기불교 출가유행자들은 paṃsukūla/pāṃsukūla라고 불리는 조악한 의복을 입고 있었다고 한다. 본고는 이에 대한 빨리어 paṃsukūla의 의미에 관해 상좌부대사파(上座部大寺派)의 삼장, 특히 『비나야삐타카』에 근거하여 고찰한 것이다.

paṃsukūla는, 아베 지온(阿部慈園)에 따르면, '오물 또는 쓰레기와도 같은, 쓸모없고 가치없는 것으로 여기저기에 버려진 누더기를 기워 만든 옷'이라고 한다. 또한 J. Dantinne에 따르면, "un vêtement fait de haillons, trouvés sur un tas d'ordures, en rue, dans un cimetière"(쓰레기더미, 길거리, 묘지에서 발견한 누더기로 만든 옷)이라고 한다. 여기서 알 수 있듯이, 보통 paṃsukūla는 '누더기를 기워 만든 옷'으로 이해되고 있다.

* 本研究は公益財団法人たばこ総合研究センターの助成によりなされたものである。

하지만, paṃsukūla 및 그 파생형인 paṃsukūlika의 용례를 살펴보면, 이러한 이해는 충분하지 않다. paṃsukūla는 '누더기를 기워 만든 옷'이 아니라, 재료로서의 '누더기'를 의미하는 경우가 있는 것이다. 또한 paṃsukūla는 옷에만 국한되지 않고 다양한 것을 지칭하는데 사용되고 있어, 어원에 맞게 '쓰레기 더미, 쓰레기 무더기'의 의미로 이해해야하는 경우가 있다. 본고에서는 paṃsukūla의 이러한 의미를 paṃsukūla 및 paṃsukūlika의 용례를 들어 제시한다.

Keywords
paṃsukūla、paṃsukūlika、sabbapaṃsukūlika、糞掃衣、頭陀

# I. はじめに

初期仏教の出家遊行者達は煩悩を振り払うために頭陀という生活規範に従って厳しい修行生活を送っていたとされる。例えば、衣については粗末な糞掃衣[1)]をまとい、食については托鉢で得た僅かな食物を口にし、住については人里離れた阿蘭若や樹下で暮らしていたという[2)]。本稿はこのうちの糞掃衣に注目し、そのパーリ語paṃsukūlaの意味について上座部大寺派の三蔵、特に『ヴィナヤピタカ』に基づき考察を試みるものである。

paṃsukūlaは、パーリ語資料を中心に頭陀に関して総合的研究を行った阿部慈園によれば、「汚物またちりあくたのごとく不用なもの無価値なものとして、処々に捨てられた布片を重ね綴りあわせて作られた衣」であるとされる[3)]。おおよそこ

1) 「糞掃」は複合語paṃsu-kūla (skt: pāṁśu-kūla) の前分paṃsuの音写であり、「糞掃衣」という漢訳語には糞を拭った穢物に等しい衣という意味が込められているという (中村元 [1992: 377] を参照)。

2) この様な見方を示す最近の論考としては並川孝儀 [2010: 85−90] がある。ただし、佐々木閑 [2000] 及び山極伸之[2001] はこの見方に若干懐疑的である。戒律文献には糞掃衣(paṇsukūlacīvara)、托鉢、樹下住に陳棄薬を加えた四依という厳格な生活規範が説かれるが、それは出家生活の理想として掲げられているだけで、実際にはその様な厳しい生活規範を緩和したより裕福な出家生活を前提に戒律文献の規定が作られているからである。なお、この問題には戒律文献の成立時期に関する議論が関わってくるので、論断することは困難である。

の様な意味でpaṃsukūlaは理解されていると思われるが、欧米においても、例えばJ. Dantinneは頭陀に関する研究書*Les qualites de l'ascete (Dhutaguṇa)* の中でこの語を“un vêtement fait de haillons, trouvés sur un tas d'ordures, en rue, dans un cimetière”(ゴミの山、路上、墓場で見つけた襤褸切れで作った衣)と理解している[4)]。R. A. Rayも*Buddhist Saints in India*で頭陀を扱う中でこの語を“clothes made from cast-off rags” (襤褸切れで出来た衣)と理解している[5)]。

しかし、paṃsukūla及びその派生形であるpaṃsukūlikaの用例を見ていくと、この一般的な理解では十分に説明できないものがあることが分かる。paṃsukūlaは「襤褸切れで作った衣」ではなく、素材としての「襤褸切れ」を意味する場合があるからである。また、paṃsukūlaは衣に限らず様々なものを指して用いられ、「ゴミのかたまり」、「ゴミの山」という原意に立ち返って理解すべき場合があるからである。以下、paṃsukūla及びpaṃsukūlikaの用例を見ていき、paṃsukūlaの意味について若干の検討を行いたい。

## II.「襤褸切れ」を意味するpaṃsukūlaの用例

paṃsukūlaという語は三蔵 では「襤褸切れで作った衣」の意味で用いられることが多いと思われるが、その材料の「襤褸切れ」を意味することがある[6)]。『テーラガーター』「二十集」にある用例がそうであり、以下に当該箇所を引用する。

piṇḍapātapaṭikkanto eko adutiyo muni
esati paṃsukūlāni anuruddho anāsavo.

---

3) 阿部慈園 [2001: 23].

4) J. Dantinne [1991: 10].

5) R. A. Ray [1994: 294].

6) PEDでpaṃsukūlaは“rags from a dust heap”と説明されているが、ここのragsが「襤褸切れ」を指すのか、それとも複数形として「襤褸の服」を指すのか判断しかねる。なお、このPEDの説明はDPLからの借用であり、一字一句同じである。

vicini aggahī dhovi rajayī dhārayī muni
paṃsukūlāni matimā anuruddho anāsavo. (Th 896–897)
無漏の聖者アヌルッダは同伴する者なく、
一人、托鉢から戻り、paṃsukūlaを求めた。
思慮あり、無漏の聖者アヌルッダはpaṃsukūlaを
吟味し、掴み、洗い、染めて、纏った。

ここではpaṃsukūlaは複数形で用いられ、それを「洗い、染め」ると言われていることから、出来上がった衣ではなく、衣を作り上げるための素材としての「襤褸切れ」を指すと考えられる[7]。註釈書『パラマッタディーパニー』(6世紀頃？、ダンマパーラ作[8])には「『染めて』とは、洗ってから、取ったものを縫い合わせて、適法な色に染めたということである」[9]とあり、ここのpaṃsukūlaが継ぎ綴る前の布切れであることが明瞭に読み取れる。

## III. 原意に立ち返って理解すべきpaṃsukūlaの用例

paṃsukūlaという語は出家遊行者の粗末な身なりを表すのに用いられ、「襤褸切れで作った衣」、「襤褸切れ」を意味するが、元々この語自体には衣・布切れの意味合いはない。村上真完・及川真介の『パーリ仏教辞典』(春秋社、2009年)に「［原意は塵芥の堆積、ゴミの山。ゴミに捨てられたぼろきれを集めて作った衣、袈裟。初期の仏教の出家行者が着用すべき衣］つぎはぎの衣、糞掃衣、ぼろ[10]」とある様に、慣用的(rūḍhi)に衣を表しているのであって、語源的(yoga)には「ゴミのかた

7) K. R. Norman [1969: 84–56] はここのpaṃsukūlaをPEDに準拠して“the rugs from a rubbish-heap”と訳している。
8) 森祖道 [1984: 530–539] を参照。
9) Th-a III 69.10–11: rajayī ti dhovitvā gahitaṃ sibbitvā kappiyarajanena rajayi.
10) 日本語で「ぼろ」と言う場合、襤褸切れを意味する場合も継ぎ接ぎの衣服を意味する場合もあるが、ここでは後者の意味で言われているのだろう。

まり」、「ゴミの山」を意味する。実は、この原意に立ち戻らなければ理解できない用例が『ヴィナヤピタカ』「経分別」にあり、以下に当該箇条を引用する。

tena kho pana samayena ambacorakā ambaṃ pātetvā bhaṇḍikaṃ ādāya agamaṃsu. sāmikā te corake anubandhiṃsu. corakā sāmike passitvā bhaṇḍikaṃ pātetvā palāyiṃsu. bhikkhū paṃsukūlasaññino paṭiggahāpetvā paribhuñjiṃsu. sāmikā te bhikkhū codesuṃ asamaṇāttha tumhe ti. tesaṃ kukkuccaṃ ahosi. bhagavato etam atthaṃ ārocesuṃ. kiṃcittā tumhe bhikkhave ti. paṃsukūlasaññino mayaṃ bhagavā ti. anāpatti bhikkhave paṃsukūlasaññissā ti.

tena kho pana samayena jambucorakā ... pa ... labujacorakā ... pa ... panasacorakā ... pa ... tālapakkacorakā ... pa ... ucchucorakā ... pa ... timbarūsakacorakā timbarūsake uccinitvābhaṇḍikaṃ ādāya agamaṃsu. sāmikā ... anāpatti bhikkhave paṃsukūlasaññissā ti. (Vin III 60.28–61.2)

その時、アンバ (マンゴー)の実の盗人達がアンバの実を落として、一纏まりにして持ち去った。持ち主達がその盗人達を追いかけた。盗人達は持ち主達を見て、一纏まりを落として、走り去った。比丘達はpaṃsukūlaと思って手に取らせ[11]、食べた。持ち主達はその比丘達を「あなた方は沙門ではない」と非難した。彼ら (＝比丘達)は疑念を抱いた ..... 世尊にこのことを伝えた。「比丘達よ、あなた達は如何なる思いで[手に取らせ、食べたのか]？」と[世尊は尋ねた]。「世尊よ、私たちはpaṃsukūlaと思って[手に取らせ、食べました]」と[比丘達は答えた]。「比丘達よ、paṃsukūlaと思って[手に取らせ、食べたの]ならば無罪である」と[世尊は言った]。

その時、ジャンブ (フトモモ)の実の盗人達が ..... ラブジャ (パンノキ)の実の盗人達が ..... パナサ(ジャックフルーツ)の実の盗人達が ..... ターラ (オウギヤシ)の実の盗人達が ..... ウッチュ(サトウキビ)の盗人達が ..... ティンバルーサカの実の盗人達がティンバルーサカの実を集め、一纏まりにし

11) 「手に取らせ」とは浄人(kappiyakāraka)に拾わせるということである。『ヴィナヤピタカ』、「薬犍度」の一節 (Vin I 212.16–27)で、「果物という硬食」(phalakhādaniya)を浄人に手に取らせ(paṭiggahāpetvā)、それを比丘が食べることを世尊が承認している。

て持ち去った。持ち主達がその盗人達を追いかけた。盗人達は持ち主達を見て、一纏まりを落として、走り去った。比丘達はpaṃsukūlaと思って手に取らせ、食べた。持ち主達はその比丘達を「あなた方は沙門ではない」と非難した。彼ら(＝比丘達)は疑念を抱いた .....「比丘達よ、paṃsukūlaと思って[手に取らせ、食べたの]ならば無罪である」と[世尊は言った]。

上記引用は波羅夷第2条 (Adinnādānasikkhāpada) の判例集 (vinītavatthu) に含まれる一節である。この概要を述べると、以下の通りである。盗人が落としていったマンゴーなどを比丘達がpaṃsukūlaと思って食べたところ、その持ち主が現れ、沙門としてあるまじき行為であると咎められた。そこで、比丘達はそれが盗みであるかもしれないと疑念を抱き、罪の有無を世尊に尋ねた。すると、世尊はpaṃsukūlaと思って食べた場合は罪とはならないと答えたという。

この一節では打ち捨てられたマンゴーなどがpaṃsukūlaと見做されており、明らかにそれは「襤褸切れで作った衣」、「襤褸切れ」ではない。この語は「ゴミのかたまり」、「ゴミの山」という原意に立ち戻って、「所有者のない不用品」として理解するべきであろう。

この意味を確認したところで、前節で扱った『テーラガーター』の用例を再び見てみたい。先ほど、そこではpaṃsukūlaを「襤褸切れ」の意味に理解した。しかし、それも「ゴミのかたまり」、「ゴミの山」という原意に立ち返って「所有者のない不用品」の意味に理解し、衣という文脈の中で語られているので、実質的に「襤褸切れ」を指すと考えることもできよう。

## Ⅳ. paṃsukūlaの多様性

前節までは、paṃsukūlaの意味についてpaṃsukūlaの用例に基づき論じてきたが、ここからはその派生形であるpaṃsukūlikaという語に注目して考察したい。

paṃsukūlikaはpaṃsukūlaに接尾辞ikaの付いた語であり[12)]、『ヴィスッディマッガ』

(5世紀、ブッダゴーサ作[13])によれば「paṃsukūlaの保持を習慣とする者」[14]を意味するという。PEDによればpaṃsukūlikaは“one who wears clothes made of rags taken from a dust heap” (ゴミ山で取った襤褸切れで作った衣を着用する者)であり[15]、これに従えばpaṃsukūlikaにとってのpaṃsukūlaは「襤褸切れで作った衣」である。

ところで、paṃsukūlikaにとってのpaṃsukūlaは「襤褸切れで作った衣」に限られるであろうか。前節で述べた様にpaṃsukūlaは「ゴミのかたまり」、「ゴミの山」という原意に立ち返り「所有者のない不用品」として理解すべき場合があり、paṃsukūlikaのpaṃsukūlaがその意味で用いられる可能性も考慮するべきであろう。

以下、その様な可能性を示すものとしてsabbapaṃsukūlikaという語を取り上げたい。この語は『ヴィナヤピタカ』に二ヶ所で現れるが[16]、先ずは波逸提第40条(Dantaponasikkhāpada) の因縁譚に現れる用例を検討したい。

> tena samayena buddho bhagavā vesāliyaṃ viharati mahāvane kūṭāgārasālāyaṃ. tena kho pana samayena aññataro bhikkhu sabbapaṃsukūliko susāne viharati. so manussehi diyyamānaṃ na icchati paṭiggahetuṃ. susāne pi rukkhamūle pi ummāre pi ayyavosāṭitakāni sāmaṃ gahetvā bhuñjati. manussā ... vipācenti: kathaṃ hi nāma ayaṃ bhikkhu amhākaṃ ayyavosāṭitakāni sāmaṃ gahetvā bhuñjissati. thero' yaṃ bhikkhu vadharo manussamaṃsaṃ maññe khādatī ti. assosuṃ kho bhikkhū tesaṃ manussānaṃ ... vipācentānaṃ. ye te bhikkhū appicchā ... vipācenti: kathaṃ hi nāma bhikkhu adinnaṃ mukhadvāraṃ āhāraṃ āharissatī ti ... pa ... saccaṃ kira tvaṃ bhikkhu adinnaṃ mukhadvāraṃ āhāraṃ āharasī ti. saccaṃ bhagavā. vigarahi buddho bhagavā: kathaṃ hi nāma tvaṃ moghapurisa adinnaṃ mukhadvāraṃ āhāraṃ āharissasi. n' etaṃ moghapurisa appasannānaṃ vā pasādāya ... pa ... evañ ca pana bhikkhave imaṃ sikkhāpadaṃ

---

12) Sadd 788.2–4.

13) 森祖道 [1984: 517] を参照。

14) Vism 48.28–29: ...paṃsukūlassa dhāraṇaṃ paṃsukūlaṃ, taṃ sīlam assā ti paṃsukūliko.

15) このPEDの説明はDPLからの借用であり、一字一句同じである。

16) sabbapaṃsukūlikaという語は三蔵の中でも『ヴィナヤピタカ』にしか現れない。

uddiseyyātha: yo pana bhikkhu adinnaṃ mukhadvāraṃ āhāraṃ āhareyya, pācittiyan ti. evañ c' idaṃ bhagavatā bhikkhūnaṃ sikkhāpadaṃ paññattaṃ hoti. (Vin IV 89.19–90.4)

その時、仏、世尊はヴェーサーリーのマハーヴァナにある重閣講堂に居られた。その時、あるsabbapaṃsukūlikaである比丘が墓場に居住していた。その者は人々によって与えられるものを受け取ることを望まなかった。墓場、樹下、戸口で先祖への施物を自ら取って、食べた。人々は「どうしてこの比丘は我々の先祖への施物を自ら取って、食べるのか。この比丘はたくましく太っている。きっと人肉を食べたのであろう」といって侮蔑し、[評判を]壊し、触れ回った。比丘達はその人々が侮蔑し、[評判を]壊し、触れ回っているのを聞きつけた。少欲の比丘達は .....「一体どうして比丘が与えられていない飲食物[17]を口に運んだのか[18]」といって侮蔑し、[評判を]壊し、触れ回り、[世尊にそのことを伝えた。世尊が]「与えられていない飲食物を口に運んだというのは本当か」と尋ねたところ、「本当です」と答えた。仏、世尊は「愚か者よ、一体どうして比丘が与えられていない飲食物を口に運んだのか。それは未信者を入信させるのに役立たず .....」と叱責し、「それでは、比丘達よ、以下の学処を説示すべきである」と述べた。与えられていない飲食物を口に運んだ比丘には波逸提がある。この様に世尊は比丘達にこの学処を定めた.

上記引用の概要を述べると、以下の通りである。sabbapaṃsukūlikaである比丘

17) āhāraを「食べ物」ではなく「飲食物」と訳したのは、経分別の語句解説に以下の様な説明があるからである。āhāraから水が除外されているということは、āhāraに水以外のあらゆる飲物が含まれることを意味していよう。
Vin IV 90.16–17: āhāro nāma udakadantaponaṃ ṭhapetvā yaṃ kiñci ajjhoharaṇīyaṃ, eso āhāro nāma. (āhāraとは、水と歯木を除く取り込むものすべてであり、これがāhāraと呼ばれる。)

18) I. B. Hornerはmukhadvāraを“the door of the face” (顔の門)と捉え“mouth”と訳し、これをāhāraを運ぶ先の場所として理解する (BD II p.344)。これに準拠してmukhadvāraを「口」と訳したが、Pātimokkhaの註釈書『カンカーヴィタラニー』によれば、mukhadvāraは「食道」(galanāḷikā)を指す(Kkh 194.1)。これに基づくと、口に入るだけでは波逸提罪にならず、喉を通って初めて波逸提罪が成立するということになる。なお、O. v. Hinüber [1968: 141 (§131)] はmukhadvāraを実体視せず、āhāraの連体詞と捉え、二語で「口を通して摂取する食べ物」の意味に理解する。また、O. v. Hinüber [1968: 62 (§48)] はāhāraをāharatiの同語源目的語と見做す.

が世間の人々からの施物を一切受け取ることを拒み、飲食物についても墓場等にあった供物を得て生活していた。それを見た世間の人々は先祖への供物を勝手に食べたと非難をし、その比丘が太っていたので人肉食の噂を立てた。それを聞き知った世尊は、その様な行為を禁じるために「与えられていない飲食物を口に運んだ比丘には波逸提がある」という学処を制定したという。

ここのsabbapaṃsukūlikaを、英訳者 I. B. Hornerは“wearing robes made entirely of rags”と訳し[19]、「襤褸切れだけで作られた衣を着用する者」の意味で理解している。しかし、sabbapaṃsukūlikaにとってのpaṃsukūlaは「襤褸切れで作った衣」に限らず、「所有者のない不用品」一般であり、sabbapaṃsukūlikaは「すべてがpaṃsukūlaである者」、「あらゆるものを paṃsukūlaに依って生活する者」を意味すると理解した方がよいであろう。この様に理解することで、sabbapaṃsukūlikaである比丘が「人々によって与えられるものを受け取ることを望まなかった。墓場、樹下、戸口において先祖への施物を自ら取って、食べた」背景がはっきりするからである。註釈書『サマンタパーサーディカー』 (5世紀、ブッダゴーサ作[20])にも、以下の様な説明がある。

> catūsu paccayesu antamaso dantakaṭṭham pi sabbaṃ paṃsukūlam[21] eva assā ti sabbapaṃsukūliko. so kira susāne chaḍḍitabhājanam eva pattaṃ katvā tattha chaḍḍitacoḷakeh' eva cīvaraṃ katvā tattha chaḍḍitamañcapīṭhakāni yeva gahetvā paribhuñjati. (Sp 842.11−15)
>
> [衣食住薬の]四種の必需品について歯木に至るまで全てのものがpaṃsukūlaである者、その者がsabbapaṃsukūlikaである。その者は墓場に捨てられた容器のみを鉢とし、そこ (墓場)に捨てられた布片のみによって衣を作り、そこに捨てられた粗末な臥具・座具のみを取って使うという[22]。

---

19) BD II p.344.

20) 森祖道 [1984: 517] 、O. v. Hinüber [1996: 104] を参照。

21) Be, Se paṃsukūlam; Ee, Ce paṃsukūlikam.

22) “kira”とあることから、この記述は伝聞情報である。ブッダゴーサが『サマンタパーサーディカー』を著した5世紀当時のスリランカにはsabbapaṃsukūlikaは存在しなかった可能性も考えられよう。

これによれば、sabbapaṃsukūlikaとは、衣にとどまらず歯木(歯を洗浄する道具)、鉢、臥具、座具といったあらゆる生活必需品を墓場に捨てられたpaṃsukūlaに依って生活している者である。ただし、この波逸提第40条によって、比丘は如何なる者も飲食物については施与されたものに依らなければならないので、実際にはsabbapaṃsukūlikaは否定される。

次に、「小事犍度」にあるsabbapaṃsukūlikaの用例を以下に引用する。

> tena kho pana samayena aññataro bhikkhu sabbapaṃsukūliko hoti. so chavasīsassa pattaṃ dhāreti. aññatarā itthi passitvā bhītā vissaram akāsi: abbhuṃ me, pisāco vatāyan[23] ti. manussā ujjhāyanti khīyanti vipācenti: kathaṃ hi nāma samaṇā sakyaputtiyā chavasīsassa pattaṃ dhāressanti seyyathāpi pisācillikā ti. bhagavato etam atthaṃ ārocesuṃ. na bhikkhave chavasīsassa patto dhāretabbo. yo dhāreyya, āpatti dukkaṭassa. na ca bhikkhave sabbapaṃsukūlikena bhavitabbaṃ. yo bhaveyya, āpatti dukkaṭassā ti. (Vin II 115.4–13)
>
> その時、あるsabbapaṃsukūlikaである比丘がいた。その者は髑髏の[24]鉢を持っていた。ある女人が見て、怖がり、ぎょっとして「おそろしい、ピシャーチャだ」と叫び声をあげた。人々は「一体どうして沙門釈子は髑髏の鉢を持っているのだろうか。まるで小ピシャーチャ[25]だ」といって侮蔑し、[評判を]壊し、触れ回った。[比丘達は]世尊にこのことを伝えた。「比丘達よ、髑髏の鉢を持つべきではない。持つならば、突吉羅罪である。比丘達よ、sabbapaṃsukūlikaになってはならない。[sabbapaṃsukūlikaに]なった者には突吉羅罪がある」、[と世尊が述べた。]

上記引用の概要は以下の通りである。sabbapaṃsukūlikaである比丘が髑髏の鉢を持っていた。それを見かけた女人が恐怖し、世間の人々がその比丘を人肉を食

---

23) $C^e$, $B^e$, $S^e$ vatāyan; $E^e$ vata man

24) この属格の用法についてはO. v. Hinüber [1968: 234 (§230)] を参照。

25) illaという接尾辞はsvārthaとして用いられる場合がある(R. Pischel [1981: 473 (§595)] を参照)。接尾辞kaを指小辞(diminutive)と捉え、pisācillikaを小さいpisācaの意味に理解した。

べる悪鬼ピシャーチャの様であると侮蔑した[26]。それを受けて、世尊は比丘達に髑髏の鉢を持つことを禁じ、併せてsabbapaṃsukūlikaになることを禁じた。

ここのsabbapaṃsukūlikaを、I. B. Hornerは“a wearer of nothing but rag-robes”と訳し[27]、宮本正尊・渡邊照宏は「常時に糞掃衣を常に用ふ」と訳し[28]、「襤褸切れで作った衣のみを着用する者」、「襤褸切れで作った衣を常に着用する者」の意味に理解している。しかし、ここでも「すべてがpaṃsukūlaである者」、「あらゆるものをpaṃsukūlaに依って生活する者」の意味で理解した方がよいであろう[29]。この様に理解すればこそ、sabbapaṃsukūlikaである比丘が髑髏の鉢を持っていた背景がはっきりとし、この様に理解しなければ、「比丘達よ、sabbapaṃsukūlikaになってはならない.....」という規定は「襤褸切れで作った衣」の着用を禁止するものとなり、頭陀の重要な一項目の否定につながるからである。『サマンタパーサーディカー』にも上記引用について以下の様な註釈がある。

> sabbapaṃsukūlikenā ti ettha cīvarañ ca mañcapīṭhañ ca paṃsukūlaṃ vaṭṭati, ajjhoharaṇīyaṃ pana dinnakam eva gahetabbaṃ. (Sp 1205.4–6)
> 「sabbapaṃsukūlika[になってはならない]」について、衣と臥具・座具はpaṃsukūlaで構わない。しかし、飲食物は与えられたもののみを取るべきである。

これによれば、「sabbapaṃsukūlikaになってはならない」と言われるのは、衣食住のうち食に限ってはpaṃsukūlaに依ってはならず、施与されたものに依らなければならないためであるという。ここからは、『サマンタパーサーディカー』が

---

26) 仏教と同じく沙門の伝統に属するジャイナの古層聖典『ウッタラッジャーヤー』にも苦行者が「ピシャーチャ」と侮蔑される記述がある (山崎守一 [2010: 71] を参照)。苦行や頭陀行を行う沙門は世間の人々にとって不気味なものとして映っていたことが窺える。

27) BD V p.156.

28) 『南伝』第4巻176頁。

29) T. W. Rhys DavidsとH. Oldenbergも“who had taken upon himself a vow to wear and use nothing but except what he could procure from dust-heaps or cemetaries”(SBE XX p.89) と訳し、sabbapaṃsukūlikaにとってのpaṃsukūlaを「襤褸切れで作った衣」に限定していない。

sabbapaṃsukūlikaを生活必需品全般をpaṃsukūlaに依っている者と理解していることが窺える。

以上、sabbapaṃsukūlikaの意味について検討してきたが、この語の存在はpaṃsukūlaという語が衣に限らず、生活全般に関わる様々な必需品を指し得ることを示唆していよう。

## V. 最後に

以上、paṃsukūla及びpaṃsukūlikaの用例に基づきpaṃsukūlaの意味を検討してきたが、その検討結果は以下の三点にまとめることができよう。

(1) paṃsukūlaは「襤褸切れで作られた衣」を必ずしも意味せず、その素材となる「襤褸切れ」を意味する場合がある。
(2) paṃsukūlaは衣以外のものについても用いられ、「ゴミのかたまり」、「ゴミの山」という原意に立ち返って「所有者のない不用品」として理解すべき場合がある。
(3) paṃsukūlaは衣に限らず様々な生活必需品を指して用いられる可能性がある。

本稿で扱ったpaṃsukūla及びpaṃsukūlikaの用例は限定的であり、更なる検討が不可欠であるが、paṃsukūlaという語を機械的に「襤褸切れで作られた衣」の意味で理解できないことは確かであろう。

## Bibliography

### 1. 略号


- Be Burmese Editon (Chaṭṭhasaṅgāyanā edition)
- BD *The Book of the Discipline,* 6 vols., trans. I. B. Horner, London: PTS, 1938–66.
- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. 2: Dictionary, ed. F. Edgerton, New Haven: Yale University Press, 1953.
- Ce Ceylonese Edition(Simon Hewavitarne Bequest edition)
- DPL *A Dictionary of the Pali Language*, ed. R. C. Childers, London: Trübner, 1875.
- Ee European Edition (PTS edition)
- PED *The PTS's Pali-English Dictionary*, ed. T. W. Rhys Davids and W. Stede, London: PTS, 1921–25.
- PTS Pali Text Society
- SBE *The Sacred Books of the East*, 50 vols., ed. F. Max Müller, Oxford: Clarendon Press, 1879–1910.
- Se Siamese Edition
- 『南伝』『南伝大蔵経』全70巻, 東京: 大蔵出版, 1935–41.


### 2. テクスト


- Kkh *Kaṅkhāvitaraṇī*, ed. K. R. Norman and W. Pruitt, Oxford: PTS, 2003.
- Sadd *Saddanīti: La Grammaire Palie d'Aggavaṃsa*, 3 vols., ed. H. Smith, Lund: C. W. K. Gleerup, 1928–30.
- Sp *Samantapāsādikā*, 7 vols., ed. J. Takakusu, M. Nagai, and K. Mizuno, London: PTS, 1924–47.
- Th *Theragāthā, in Thera- and Therī-gāthā*, ed. K. R. Norman and L. Alsdorf, London: PTS, 1966.
- Th-a *Paramattha-dīpanī Theragāthā-aṭṭhakathā*, ed. F. L. Woodward, London: PTS, 1940–59.

• Vin *Vinaya Piṭakaṃ*, 5 vols., ed. H. Oldenberg, London: Williams and Norgate, 1879–83.
• Vism *Visuddhimagga of Buddhaghosācariya*, ed. H. C. Warren, rev. Dharmananda Kosambi, Cambridge: Harvard University Press, 1950.

## 3. 参照文献

• Dantinne, Jean [1991] *Les qualités de l'ascete (Dhutaguṇa): etude sémantique et doctrinale*, Bruxelles: Thanh-Long.
• von Hinüber, Oskar [1968] *Studien zur Kasussyntax des Pāli, besonders des Vinaya-Piṭaka*, München: J. Kitzinger.
• von Hinüber, Oskar [1996] *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin: Walter de Gruyter.
• Norman, Kenneth R.[1969] *The Elders' Verses I: Theragāthā*, London: PTS.
• Pischel, Richard [1981] *A Grammar of the Prakrit Languages*, trans. Subhadra Jha, 2nd ed., Delhi: Motilal Banarsidas.
• Ray, Reginald A. [1999] *Buddhist Saints in India: a study in Buddhist values and orientations*, New York: Oxford University Press.
• 阿部慈園 [2001] 『頭陀の研究－パーリ仏教を中心として』, 東京: 春秋社.
• 佐々木閑 [2000] 「『無一物』と『自活の放棄』」, 『印度哲学仏教学』第15号, pp.21–34.
• 中村元 [1992] 『原始仏教の成立』 (中村元選集[決定版]第14巻), 東京: 春秋社.
• 並川孝儀 [2010] 「原始仏教の世界」,『仏教の形成と展開 新アジア仏教史 2 (インドII)』, 東京: 佼成出版社, pp.61–114
• 森祖道 [1984] 『パーリ仏教註釈文献の研究』, 東京: 山喜房仏書林.
• 山極伸之 [2001] 「律蔵に規定されない四依」,『印度学仏教学研究』第50巻第1号, pp.447–453.
• 山崎守一 [2010] 『沙門ブッダの成立－原始仏教とジャイナ教の間』, 東京: 大蔵出版.

# On *paṃsukūla*

Michihiko Aono
Project Researcher
University of Tokyo

This paper examines the meaning of the term *paṃsukūla* as found in the *Theravāda Tipiṭaka*, especially the *Vinayapiṭaka*. It is thought that the early Buddhist monks wore *paṃsukūla*, described by Jion Abe as a "robe made of rags which were discarded here and there as useless and worthless things like filth." This description is commonly accepted in foreign countries as well as in Japan. Jean Dantinne views it as "un vêtement fait de haillons, trouvés sur un tas d'ordures, en rue, dans un cimetière," while Reginald A. Ray calls them/it "clothes made from cast-off rags."

The popular definition of *paṃsukūla* in the *Theravāda Tipiṭaka*, is accurate in many cases, but the term does not always mean "robe made of rags." It can also mean "refuse rags," which are materials of robe. In addition, it is used to describe an ownerless "lump of refuse" or "heap of waste," which is an original meaning of the term. This article provides examples of *paṃsukūla* and its derivative, *paṃsukūlika*, from the *Theragāthā* and the *Vinayapiṭaka* to validate the meanings described above.

Keywords
paṃsukūla, paṃsukūlika, sabbapaṃsukūlika, fènsǎoyī(糞掃衣), dhuta

2016년 01월 30일 투고
2016년 02월 28일 심사완료
2016년 02월 29일 게재확정